収蔵資料紹介

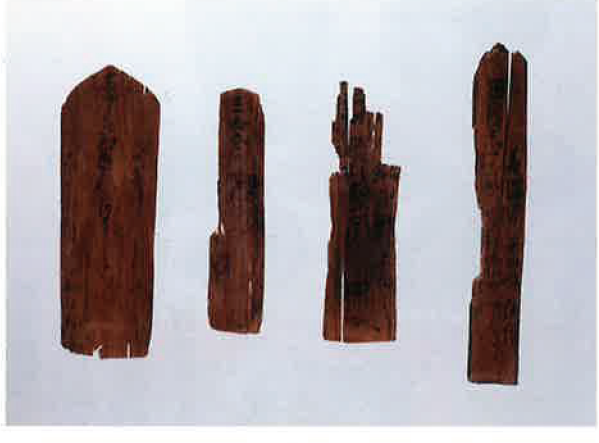
長浜市鴨田遺跡出土巡礼札

宝徳四年（一四五二）
滋賀県蔵

近畿二府四県と岐阜県に散在する観音霊場を巡拝する「西国三十三所巡礼」は、信仰・観光の両方を満たすことのできる行為として、現在も盛んに行われています。その起こりは鎌倉時代初め頃とされ、修験者の修行の一つだったようですが、室町時代には一般にも広まって、「巡礼の人、道路織るが如し」（『竹居清事』）と禅僧の語録に記されるまでになっていました。

近江国（滋賀県）内の札所は、岩間寺・石山寺・三井寺・宝厳院（竹生島）・長命寺・観音正寺の六ヶ寺です。琵琶湖の島である宝厳院や湖辺の長命寺などを巡るために、船も多く利用されました。

現在は、巡礼の人の多くは、御朱印帳などに各札所の御朱印を集めていますが、中世では逆に、自分が巡拝した記念として、名前や日時を記した札（巡礼札）を持参して、納めていたようです。

長浜市の鴨田遺跡では、おそらく各札所に納めるために巡礼者が持ち歩いていたのであろう巡礼札二十点が、十五～六世紀の集落の各屋敷を区画する溝から出土しました。この場所は札所ではないのですが、宝厳寺への渡し場にも近く、他の出土品などから、何らかの宗教施設があった可能性が高いと考えられています。

いずれの札も様式は共通していて、薄く細長い木札の中央に「三十三所巡礼」の文字を大書し、その両脇に本人を含む巡礼グループの出身地や年月日を記しています。札に見える人々は、近江のみならず、美濃（岐阜県）や伊勢（三重県）・摂津（大阪府）などからやってきているようです。発掘で出土することは非常に珍しいため、「稀品」の一つとして春季特別展「稀品・逸品―滋賀県出土の指定文化財を中心に―」で展示することになりました。（髙木叙子）